

キリスト教と文化 V

本研究プロジェクトは、日本が鎖国をといた後に、キリスト教をはじめとする様々な西洋文化がどのように移入されて受容されてきたかを、専門領域の異なる5人の研究者がそれぞれの分野で検証することを目的としている。

各研究者が歴史的背景を理解し知識を共有できるように、研究初年度に当たる2005年夏には全員で長崎へ赴いて現地調査を行った。訪問先は平戸市の松浦資料博物館や切支丹資料館、長崎市では旧外海町のド・ロ神父記念館と出津教会、大浦天主堂や浦上天主堂、出島をはじめシーボルト記念館などである。とくに長崎県美術館では特別観覧をお願いして、重要な蒐集品である須磨コレクションを、スペイン絵画を中心に調査した。

また私たち全員が知見を広げ、深くするために、研究会を兼ねた講演会を2005年度と2006年度、それぞれ3回、あわせて6回開催した。講師を引き受けていただいたのは、2005年度が塩谷純氏（東京文化財研究所）、西脇良氏（南山大学）、本山哲人氏（早稲田大学）、2006年度は饗庭孝男氏（青山学院大学名誉教授）、田口美穂氏（鶴川シオン幼稚園園長）、児島薫氏（実践女子大学）である。内容を簡潔に記しておく、塩谷氏は明治時代の二人の日本画家、橋本雅邦と川端玉章が歌舞伎界の名優、九代目市川団十郎と五代目尾上菊五郎にそれぞれ譬えられたことを手がかりに、流入する西洋文化を前にした日本の伝統文化の在り方を具体的に検証された。西脇氏は、自然と触れ合う中で成立する宗教的価値対象（神、仏、霊など）と自己に対する宗教的な見方（自己の存在の有限性、無力さなど）を検討することで、日本人の宗教性や日本の宗教文化の一面を明らかにされた。本山氏は、明治以降日本でも愛好されてきたシェイクスピアの戯曲の中から、『タイタス・アンドロニカス』を取上げて、シェイクスピア研究の新しい動向とその成果を報告された。

二年目には、饗庭氏はヨーロッパ各地のロマネスク聖堂をスライドで紹介しながら、中世のキリスト教の多様な態様や修道院の活動について、氏の体験に基づきながら発表された。田口氏は幼稚園園長としての経験を踏まえて、今日の日本の幼児教育の問題点を指摘し、氏が実践されているキリスト教保育の具体的な内容について話しをされた。児島氏は日本近代美術の研究者として、海外留学から帰国した原田直次郎、黒田清輝、久米桂一郎たちの活動を通して、西洋美術がわが国に紹介され、それが曲折を経ながらいかに美術教育に取り入れられていったかを明らかにされた。

こうした研究活動を踏まえて、プロジェクトメンバーは成果をまとめ、本年報に以下の通り発表する。大野芳材は、明治20年代に起こった「歴史画論争」を手がかりに、留学し

た日本人画家が、西洋美術の根幹の理念のひとつである「歴史画」を日本に移植する過程を幾点かの作品を通して検証し、明治時代の西洋美術の受容の問題を論じた。また、西洋美術での歴史画の成立過程にも触れている。浅見均は、アメリカ人女性宣教師 Annie Lyon Howe の神戸でのフレーベルの著作の翻訳、唱歌活動、講演などを通しての日本の幼児教育への強い影響を論じながら、とくに「理科教育」に焦点を当ててその内容を考察した。山田美穂子は、明治34年に日本政府から招かれ、島津家の子弟の家庭教師として過ごしたイギリス人女性 Ethel Howard の『日本の思い出』を精読することから、異文化交流、女性による旅行記や回想録という問題に取り組んだ。菅野幸恵は、西洋の心理学が明治時代に移入され、それが受容され展開していく過程を、とりわけ教育での応用という点に注目して検証し、大正時代には心理学的な検査や調査が科学性や客観性を前面に押し出すことで発展したことを明らかにした。

なお、本研究プロジェクトの一員であった鈴木律子は、明治時代の日本におけるフランス語教育というテーマで研究を進めていたが、まことに遺憾なことだが、資料の整理途上のために期日内に論文を完成させることができなかった。研究プロジェクトの代表として、充分に研究を統括しえなかったことをお詫び申し上げる。 (大野芳材)

東西「歴史画」小考

大野 芳材 (芸術学科教授)

明治期における宣教師 A.L.ハウの保育実践について

— 保育への自然導入についての一考察 —

浅見 均 (子ども学科准教授)

明治日本における西洋文化受容の一例

— 英国人家庭教師エセル・ハウードの『日本の思い出』論 —

山田美穂子 (英文学科准教授)

明治・大正期の日本における西洋の心理学の受容と展開

菅野 幸恵 (子ども学科准教授)